JTF JOURNAL

翻　訳　の　未　来　を　考　え　る

社団法人日本翻訳連盟機関誌

日本翻訳ジャーナル

2011年7月／8月号　#254

イベント報告

コラム

連載講座

翻 訳 の 未 来 を 考 え る
日本翻訳ジャーナル

254

2011年7月／8月号

定価：1,500 円

社団法人日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
ＴＥＬ：03-6228-6607
ＦＡＸ：03-6228-6604
発行人：東 郁男（会長）
編集人：河野 弘毅
ＤＴＰ：（有）デジタル・ワークス
E-mail：info@jtf.jp
ＵＲＬ：http://www.jtf.jp/

C O N T E N T S

CALENDER

2011 JULY

第 18 回 東京国際ブックフェア（TIBF2011）

▶ 2011 年 7 月 7 日（木）～ 10 日（日）
開催場所：東京ビックサイト
「第 18 回 東京国際ブックフェアは、1200 社が出展、10 万人が来場する日本最大のブックフェアです。毎年、全国各地の書店、図書館・学校関係者、さらには海外出版社や一般読者が多数来場。」（HP より引用）
http://www.bookfair.jp/

情報処理学会 第 202 回自然言語処理研究会（SIGNL202）

▶ 2011 年 7 月 14 日（木）～ 15 日（金）
開催場所：山形大学 米沢キャンパス
http://www.nl-ipsj.or.jp/

2011 AUGUST

International Federation of Translators XIX World Congress

▶ 2011 年 8 月 1 日（月）～ 4 日（木）
開催場所：サンフランシスコ（米国）
FIT（International Federation of Translators、国際翻訳家連盟）の総会。
http://www.fit2011.org/index.htm

7th Language & Technology Conference

▶ 2011 年 8 月 20 日（土）～ 22 日（月）
開催場所：Córdoba（アルゼンチン）
IMTT は南米を中心に翻訳・ローカリゼーション業界イベントを継続して開催。
www.imttconference.com

TC（テクニカルコミュニケーション）シンポジウム 2011 プレ開催

▶ 2011 年 8 月 30 日（火）
開催場所：工学院大学・新宿（予定）
例年と異なり特別セッションだけによるプレ開催。
http://www.jtca.org/symposium/index.html

2011 SEPTEMBER

MT Summit XIII

▶ 2011 年 9 月 19 日（月）～ 23 日（金）
開催場所：Xiamen National Accounting Institute (XNAI)（中国アモイ）
機械翻訳分野の国際学会。昨年度（オタワ開催）の参加者は約 300 名。
http://mt.xmu.edu.cn/mtsummit/

第 4 回特許翻訳ワークショップ

▶ 2011 年 9 月 23 日（金）
MT Summit ＸⅢと同時開催

2011 OCTOBER

TC（テクニカルコミュニケーション）シンポジウム 2011 京都

▶ 2011 年 10 月 5 日（水）～ 7 日（金）
開催場所：京都リサーチパーク（予定）
テクニカルコミュニケーション業界の年間最大イベント。
http://www.jtca.org/symposium/index.html

フランクフルト・ブックフェア 2011

▶ 2011 年 10 月 12 日（水）～ 16 日（日）
開催場所：フランクフルト・アム・マイン（ドイツ）
書籍、メディア、版権に関する世界最大規模の展示会。約 100 ヶ国から 7,300 社が出典、299,000 人の参加者と 10,000 人の報道関係者が集まる。（参考資料 HP）
http://www.buchmesse.de/en/fbf/

Tekom

▶ 2011 年 10 月 18 日（火）～ 20 日（木）
開催場所：Wiesbaden（ドイツ）
テクニカルコミュニケーション業界の国際イベント。

Localization World Santa Clara, California

▶ 2011 年 10 月 19 日（水）～ 21 日（金）
開催場所：サンタクララ（米国）
ローカリゼーション業界の世界最大級イベント。
http://www.localizationworld.com/

2011 NOVEMBER

JTF 翻訳祭 2011

▶ 2011 年 11 月 29 日（火）
開催場所：アルカディア市ヶ谷
翻訳業界の国内最大イベント。
http://www.jtf.jp/jp/festival/festival_top.html

平成 23 年度
JTF 通常総会・開催報告

2011 年 6 月 2 日（木）、ホテル銀座ラフィナートにおいて、平成 23 年度 JTF 通常総会、基調講演および懇親会が開催されました。

総会では、以下の議案について決議し、すべてが承認されました。特に第 5 号議案の公益法人制度改革においては、当連盟の一般社団法人への移行が承認されました。今後のスケジュールとしては、今秋をめどに臨時総会を開催し、一般社団法人移行に向けた定款変更に関する決議を行います。来年 4 月より一般社団法人として運営開始する予定です。

1. 平成 22 年度事業報告の件
2. 平成 22 年度決算報告並びに監査報告の件
3. 平成 23 年度事業計画の件
4. 平成 23 年度収支予算の件
5. 公益法人制度改革の件
6. その他

JTF 通常総会懇親会報告

リチャード・ウォーカー氏の基調講演は、「日英翻訳：音声認識が翻訳の生産性を変える」と題して、音声認識の基礎知識や活用法について音声認識ソフトのデモを交えながら講演いただき、興味深いお話を聞かせていただきました。基礎知識と一定のトレーニングは必要となりますが、工夫次第では翻訳作業を根本的に見直すツールになる可能性があります。参加者の音声認識に対する関心は高く、講演会場は満席となりました。

（講演会の報告を今月号のイベント報告に記載しましたのでご覧ください）

基調講演後に、同ホテル・日光の間において懇親会が行われました。経済産業省の中内重則様から来賓のご挨拶を頂きました。震災による影響も懸念されていましたが、今年も多数の会員の方々が参加され、翻訳談義で盛り上がり楽しいひとときとなりました。

【懇親会挨拶の要旨】

<東 郁男会長>

HIGASHI Ikuo

景気の方は、リーマンショックからは徐々に回復傾向にあり、日本の基幹産業である自動車産業も回復途中にあったと思います。しかしながら、3 月 11 日の大震災を境に日本国も非常に厳しい局面に見舞われております。企業によっては翻訳の発注時期を少し見合わせるような状況もあるようですが、大きな翻訳需要の減少という話は聞いておりませんので、状況が落ち着けば徐々に回復していくと思います。

今年の夏は、特に東京の方で電力需給の関係もあり、各企業そして家庭に対して 15% の節電が要求されております。当翻訳連盟でもできるだけ協力していく必要があると思います。経済産業省からも、節電対策のサンプル等も発表されておられますので、事務局から会員の方々に節電のお願いということでご連絡させていただくかと思います。

技術もどんどん進歩し、世の中も変わっていきますので、翻訳業界そして翻訳連盟自身も新しいものを模索しながら進化していく必要があると思います。本日、当連盟の一般社団法人への移行申請について皆様にご承認いただきましたので、より業界メリットを追求する方向性で今後連盟も活動していきたいと思います。引き続きのご支援、ご協力の方をお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

<経済産業省　商務情報政策局サービス産業課　企画官　中内 重則氏>

NAKAUCHI Shigenori

経済産業省では、原子力発電所に加えまして電力、ガスといったライフラインにつきましても早期の復旧に向けて今最大限の取り組みをしております。その他にも資金繰り対策といたしまして災害関係保証でありますとか、セーフティネットの保証の整備を図るなどさまざまな対策を講じまして日本経済が一日も早く回復軌道に乗るように今全力で取り組んでいるところでございます。

このたびの震災で多くの電力供給設備に大きな損害が生じました。皆様方には節電とともに地域ごとの計画停電ということにもご協力いただきまして誠に有難うございました。これから冷房需要を迎える今夏に向けまして、家庭においても産業においても大変影響がございます計画停電を避けるためにも、電力供給力の更なる向上に取り組んでいくとともに、その一方で一層の節電というのをお願いいたします。引き続きご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、東会長のもとで本連盟が今後ますます繁栄し、そしてほんやく検定といった人材育成事業といったものを通じまして翻訳業の健全な発展、さらなる飛躍を祈念いたします。ありがとうございました。

◆JTF 事務局通信

◆**会員数**：法人会員 138 社　個人会員 314 名　賛助会員 3 社　合計 455（前年同期比▲ 10%）

◆**会員によるお友達紹介制度**：東日本大震災の影響により、今年度は例年に比べて 1 ～ 2 割ほど退会数増が見込まれます。会員の大幅な減少を防ぐために、入会促進として会員によるお友達紹介制度を実施し、会員による口コミ効果を活用して、新規入会を増やしていきたいと計画しております。

◆**ほんやく検定委員会**：「JTF ほんやく検定公式問題集」初版 2,500 部を刊行し、発売を開始いたしました。

◆**翻訳祭企画実行委員会**：第 1 回委員会が 4 月 27 日に開催されました。今回のテーマは**「翻訳業界、もっと豊かに、もっと幸せに」～だから、変えよう自分たちを～**となりました。

◆**公益法人制度改革**：6 月 2 日の通常総会で当連盟は一般社団法人へ移行することが議決されました。それに伴い、定款変更および臨時総会の開催等を経済産業省および内閣府にも確認しながら進めてまいります。

◆**夏期の電力節電対策について**：政府が発表いたしました「夏期の電力需給対策」では、大口需要家のみならず、小口需要家（契約電力 500KW 未満）および家庭も 7 ～ 9 月の平日の午前 9 時から午後 8 時までのピーク期間・時間の需要抑制の目標を一律マイナス 15% としております。当連盟もガイドラインを策定し、会員各位の協力を要請してまいりますので、会員各位のご協力をお願いいたします。

第 21 回 JTF 翻訳祭開催のおしらせ

社団法人日本翻訳連盟
第 21 回翻訳祭企画実行委員会

来る 2011 年 11 月 29 日（火)、東京のアルカディア市ヶ谷において「第 21 回 JTF 翻訳祭」を開催致します。「翻訳祭」は翻訳者・翻訳会社・翻訳を発注するソースクライアントなど、翻訳に関わる全ての方々が一堂に会する日本最大の翻訳業界の祭典です。お誘い合わせのうえ、ぜひご参加ください。

第 21 回　JTF 翻訳祭プログラム

【日　時】2011 年 11 月 29 日（火）10:00 〜 20:00（開場 9:30 〜）
【テーマ】「翻訳業界、もっと豊かに、もっと幸せに」
〜だから、変えよう自分たちを〜
【場　所】アルカディア市ヶ谷（東京）
【総来場者数】700 名（見込み）［前年度実績 691 名］
【後援（予定）】経済産業省・一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会・日本翻訳者協会（JAT）他

全体プログラム　※詳細は後日ウェブにて公開します

- **翻訳プラザ**（展示＆商談ブース）
- **分科会**
  6 会場による全 24 のマルチセッション形式
  定員：各会場 120 名（合計 720 名）
  医薬、特許、映像、日英翻訳、金融、IT・ローカリ、法律、自動車、多言語、出版など（各 90 分）
- **プレゼン・製品説明コーナー**（出展会場に隣接）
  おもに翻訳支援ツールメーカーによる製品説明コーナーを新たに設置します。
- **懇親会**　120 分

お問い合わせ

（社）日本翻訳連盟 事務局
TEL：03-6228-6607　E-mail：info@jtf.jp

第 21 回 JTF 翻訳祭
セッション公募のおしらせ

社団法人日本翻訳連盟
第 21 回翻訳祭企画実行委員会

「第 21 回 JTF 翻訳祭」では、翻訳祭委員会が策定するセッション以外に、公募による講演枠をご用意しました。 今年度の翻訳祭テーマを踏まえ、翻訳に関連する品質管理、新しいビジネスモデル、翻訳環境の改善など、今後の翻訳市場にインパクトを与える 講演テーマを募集いたします。講演を希望される方は、次ページの要項をご覧のうえ、事務局までご応募ください。法人、個人問わずご応募をお待ちしております。

公募期間　**7 月 25 日（月）まで**

なお、公募枠に限りがありますので、お早めにお申込みいただくことをお勧めします。翻訳祭委員会にて厳正に審査のうえ、公募セッションを決定し、翻訳祭サイトにて公表いたします。

ご検討の上、どうぞ「セッション公募」にお申し込みいただき、この機会を有効にご活用ください。

第21回　JTF翻訳祭
「セッション公募」について

【公募内容】講演もしくは、パネルディスカッションへのパネリストとしての参加

【公募人数】若干名加

【講演時間】90分

【応募資格】翻訳関連の仕事に従事されている方（翻訳者、翻訳会社、クライアントなど）

【公募テーマ】翻訳祭の全体テーマを踏まえ、翻訳業務や翻訳ビジネスに関連する内容

※ただし、企業及び個人のPRを目的とした内容はご遠慮ください。

※翻訳ツールメーカーの方は、「プレゼン・製品紹介コーナー」にて製品説明会の募集（有料）を行っていますので、そちらにお申し込みください。

【公募方法】以下の必要書類をご用意のうえ、事務局までメール <info@jtf.jp> でお送りください。

❶プロフィールシート（お名前、法人名・部署役職名、住所、E-mail、電話番号、略歴を明記）

❷講演テーマと内容の概略（A4用紙1枚）

❸その他講演テーマに関連する資料（論文、講演資料など）

【応募締切】2011年7月25日（月）事務局必着

【選考結果の発表】

8月上旬～中旬をメドに採択された方にご連絡いたします。

※講演に対する謝礼金はありません。

※交通費、宿泊費の支給はありません。

お問い合わせ

（社）日本翻訳連盟 事務局

TEL：03-6228-6607　E-mail：info@jtf.jp

JTF翻訳祭2011

出展企業を募集します。

「JTF 翻訳祭」は翻訳者・翻訳会社・翻訳を発注するソースクライアントなど、翻訳に関わるすべての方が一堂に会する日本最大の翻訳業界の祭典です。翻訳者や翻訳会社の方にアピールしたい製品やサービスをお持ちの企業にとっては PR のチャンスです。ぜひ「翻訳プラザ（展示＆商談ブース）」にお申し込みいただき、この機会を有効にご活用ください。

■展示・デモコーナー【PC 利用可】

JTF 会員　：**50,000** 円（税込）
非会員　　：**70,000** 円（税込）

■書籍・翻訳相談コーナー【PC 利用不可】

JTF 会員　：**30,000** 円（税込）
非会員　　：**50,000** 円（税込）

■プレゼンコーナー【1コマあたり】

出展社　　：**50,000** 円（税込）
非出展社：**70,000** 円（税込）
（会員・非会員とも同じ価格です）

くわしくは下記 URL より入手できる**「第 21 回翻訳祭_翻訳プラザ出展のご案内」**をご覧ください。

CLICK HERE http://bit.ly/oSsejd

お問い合わせは JTF 事務局までお願いします。

2011年11月29日（火）

開催

会場面積が 2 倍になります！

ことしは昨年度パーティ会場として使用した大ホールを展示会場に設定しました。昨年度と比べて会場面積が 2 倍となり、より多くの方が展示会にゆったりとご参加いただけます。また、展示会場内に複数のミニシアターを用意し、製品説明などにご活用いただけます。

JTF TRANSLATION FESTIVAL 2011

翻訳業界、もっと豊かに、もっと幸せに —— だから、変えよう自分たちを

広告スポンサーを募集します。

JTF では、翻訳祭の開催にともない専用ホームページやパンフレットなど豊富な広告媒体をご提供します。翻訳祭サイトの訪問者層に的を絞った広報が可能となるため、効率的に PR を行うことができます。是非有効にご活用いただき、御社の営業活動にお役立てください。

■ホームページ広告

JTF 会員：30,000 円（税込）
非会員　：50,000 円（税込）

■パンフレット広告

JTF 会員：20,000 円（税込）
非会員　：30,000 円（税込）

くわしくは下記 URL より入手できる「第 21 回翻訳祭_スポンサー広告のご案内」をご覧ください。

CLICK HERE http://bit.ly/o9QRFE

お問い合わせは JTF 事務局までお願いします。

KAJIKI Masanori

第 22 回 日英 - 英日翻訳国際会議（IJET-22 シアトル）レポート

梶木 正紀
（株）MK 翻訳事務所
General Manager

ご挨拶

みなさん、こんにちは。特許翻訳を専門に取扱う株式会社 MK 翻訳事務所の General Manager のマサ（Masa）です。弊社は本年度から JTF の法人会員になりました。拙筆ではございますが、本レポートをもちまして私のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、5 月 14 日・15 日に、アメリカのワシントン州シアトルで開催されました IJET（第 22 回日英・英日翻訳国際会議シアトル会議（International Japanese English Translation（IJET）Conference、以下「IJET-22」）についてご紹介いたします。なお、本会議は、シアトル市内のホテルモナコシアトルにて開催されました。

IJET について

本題の前に、IJET について簡単にご説明いたします。IJET は日本語／英語の翻訳者たちが顔を合わせ、知識や技術を共有し、ネットワークを築く場として、約 20 年前に日本翻訳者協会（JAT）によって始められた年次会議です。本会議は、毎年テーマが設定され、そのテーマに沿ったセミナーやパネルディスカッションが行われます。また、翻訳者または翻訳会社間のコミュニケーションを積極的に深められるよう、前夜祭、ネットワーキングランチ、晩餐会等が企画されています。開催地は、日本と英語圏の国で交互に。過去、日本では、沖縄、神戸、宮崎など、英語圏では、シドニー（オーストラリア）、バース（イギリス）、イリノイ（シカゴ）などで開催されました。来年は、広島市で開催予定です。

IJET-22 のレポート

IJET-22 は「変革期に利益を上げるには」というテーマの下、(1)顧客開拓、(2)翻訳者・通訳者のためのマーケティング、(3)生産性の向上、(4)分野別（法律、医薬、テクニカル等）のセッションとワークショップ他合計 24 セッションというプログラムがありました（詳細は http://ijet.jat.org/en/ijet-22/program ご参照）。同じ時間帯に 3 ～ 4 つのプログラムが開催されますので参加者は自分に興味のあるプログラムを選択することができます。

今回の IJET-22 のための私のスケジュールは以下の通りでした。

日付	予定
5 月 12 日	大阪発 シアトル着
5 月 13 日	IJET オプション企画／ボーイング社見学ツアー、IJET-22 前夜祭
5 月 14 日	IJET1 日目（各種セミナー（パネルディスカッションに出演）、ネットワーキングランチ、晩餐会）
5 月 15 日	IJET2 日目（各種セミナー（プレゼンテーション担当）、弊社取引先シアトル在住翻訳会社社長及びそのスタッフの方とランチ）
5 月 16 日	オフ（シアトル市内観光及びシアトルマリナーズ戦観戦）
5 月 17 日	シアトル発
5 月 18 日	大阪着

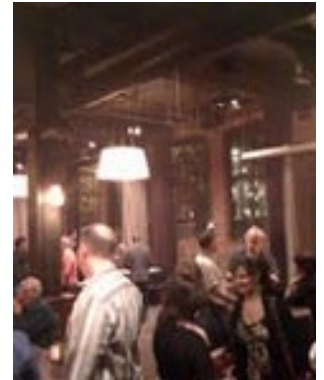
それでは、上記のスケジュールに沿ってレポートいたします。

5 月 12 日（木）

関空からシアトルまで約 10 時間のフライト。シアトルに無事到着するも「寒すぎる」という印象。この日は特に既定のスケジュールがなかったため、ダウンタウンを散策。坂が多い分、ダウンタウンから海を一望でき、建物も統一感がありとても美しい街だという印象。シーフード中心の食事もとても美味しい。翌日からの IJET-22 への期待が高まる。

5 月 13 日（金）

IJET-22 のオプション企画である「ボーイング社見学ツアー」に参加。参加者約 20 名。世界最大の容積を誇る建造物（13，385，378 平方メートル）を見学し、世界各地に出荷される飛行機の組み立て工程を間近に見ることができるツアー。ガイドはボーイング社の専任スタッフ（英語）。

ホテル帰着後、翌日のパネルディスカッションの打合せ。その後、ホテル近くのレストランにて IJET-22 前夜祭に参加。久々の再会が多く、楽しい時間を過ごすことが出来ました（その後、二次会が催された様子）。

楽しい前夜祭の様子

5 月 14 日（土）

いよいよ、IJET1 日目。受付で IJET-22 ロゴ入りのビジネスバッグを受領（バッグの中身は資料）（写真参照）。IJET 開催中の 2 日間は常にこのバッグとともに行動をしていたほど、本当に重宝しました。個人的には紙袋よりこのようなバッグの方が使いやすかったです。

これが重宝したバッグ！

この日、印象に残ったセミナー。

●**プログラム名：**Transnational Contract and Dispute Resolution: How to Create Effective Contracts and Secure Payment from Clients

講師は、シアトル在住の日本人女性弁護士。翻訳者、翻訳会社に関わる法律問題について。特に、個人翻訳者の職業保険（Professional Liability Insurance）加入を推奨されていたのが印象的でした。日本では翻訳会社も職業保険に加入しているのは数社しかない一方、アメリカでは個人翻訳者対象の職業保険が存在することに驚きました（日本では職業保険に加入している翻訳会社が数社しかないと言うと、その弁護士さんが驚いていましたが）。

●**プログラム名：**Panel: The Agency Perspective

私を含め 4 名の翻訳会社経営者がパネリストとして参加。翻訳会社は翻訳者をどのように採用またはアサインしているかなどを意見交換。翻訳者の印象的な履歴書の書き方、翻訳者の SNS 利用の際の注意点、インターネットの質問サイトに翻訳に関する質問掲載についての警告など。また、「翻訳者は仕事を断れるが、翻訳会社は仕事を断れない」など厳しい実情の吐露など。

その日の夜、晩餐会（Banquet）に参加。セミナー講師、パネリストをはじめ、翻訳者、翻訳会社が親交を深める絶好の機会として利用させて頂きました。また、2012 年に開催される IJET-23（広島）の告知スピーチなど（大変好評だった本スピーチは facebook の IJET-23 のファンページの "IJET-23 Introduction speech by Mikako Miyahara" から視聴可能）。

晩餐会の様子

5 月 15 日（日）

この日は私がプレゼンテーションを担当するプログラムがあったためそれを中心に。

●**プログラム名：**Beyond Translation for Information: How to Become Indispensable in J to E Patent Translation for Filing and Litigation

シアトルにある特許翻訳会社 Patent Translations Inc. の代表のマーティン・クロス氏と共同のプレゼンテーション。クロス氏は、現在、日英特許翻訳では世界最高峰の 1 人と言われている方。今回、IJET がシアトルで開催されるため、私の方からクロス氏に共同プレゼンテーションを提案。クロス氏は、ATA（American Translators Association）等でも数度プレゼンテーション経験があり、特許翻訳のバイブルといえる「Patent Translators Handbook（ATA 発行）」の共同著者（co-author）でもいらっしゃいます。このような大変著名な方と共同プレゼンテーションを開催できたことは、大変光栄でした。

私のプレゼンテーションの内容は、どうすれば特許翻訳者としてボトムアップできるか、というもの。私の個人的な見解ですが、トップクラスに入る特許翻訳者は、1 日当たり 1 万文字処理できます（注：スピードが全てではありませんが）。1 万文字処理するとなると真っ向から原稿に向かってただ単にキーボードを叩くだけでは 1 万文字処理することは不可能です。翻訳ソフトを使ってもいいですし、音声入力ソフトを使ってもいいでしょう、とにかく何か工夫が必要です。私が紹介したのは「リカードの比較生産理論」です。この理論は、大変複雑で、数式も数多く出てきますので、非常に難しい経済理論ですが、幸い、野口悠紀雄氏の「超」勉強法（2011 年、幻冬舎）の 172 ページにコンパクトに説明されていますので、それを簡単にご説明しますと、「アシスタントを雇って（賃金を払って）補助作業をさせても―つまり、出費があっても―最終的な利益は、アシスタントを雇わない場合よりも雇った場合の方が増大する」というものです。

この日は、クロス氏、同社オフィス・マネージャーのミリエットさん、弊社オフィス・マネージャーの加納、それと私で Pike Place Market でランチをし翻訳会社の経営について情報交換を行うなど大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

筆者（左） マーティン・クロス氏（右）

壇上から厳しい視線をやる筆者

5 月 16 日（月）

この日は完全オフ。IJET-22 参加者 5 名程でセーフコフィールドでマリナーズ戦を観戦しました。IJET-22 が終わって即帰られる方もいれば、観光を楽しんだり、バカンスを兼ねて近郊へ足を伸ばす方もいらっしゃいます。ここでクイズですが、イチローが放つ内野の間を抜けて行くヒットのことをセーフコフィールドでは何と言っているでしょうか[1]。答えは、レポートの最後を見て下さい。ちなみに、イチロー選手の盗塁失敗を目撃しました。イチロー選手が盗塁を失敗する姿なんてなかなかお目にかかれないので、ちょっと得した気分がしました。

IJET-22 の運営委員会の皆様、ボランティアスタッフの皆様、大変お世話になりました。皆様方の多大なるご尽力のお陰で IJET-22 で大変充実した時間を過ごすことができました。

クイズの答え[1] 「イチローリング（Ichi-rolling）」

お知らせ

IJET-23　広島大会

私は、2012 年 6 月 2 日・3 日開催の IJET-23（広島）の広報を担当しています。テーマは「Working in a Borderless World」です。参加申込は 2011 年 12 月から受付予定。詳細は下のホームページ、ツイッター、フェースブックまで。

Japanese homepage: http://ijet.jat.org/jp
English homepage: http://ijet.jat.org/en
Twitter: @IJET_23
facebook fanpage: http://www.facebook.com/IJET23Hiroshima

2012 JTF Seminar in Osaka（仮）

来る 2012 年 1 月に大阪大学中之島センター（大阪市北区中之島）で「JTF Seminar in Osaka（仮）」を開催予定です。私も特許翻訳に関するセミナーを 1 つ担当させていただく予定です。本セミナーでは USTREAM を使ってセミナー内容を世界中に配信し、また世界中から参加していただく予定です。皆様、是非、お越しください。

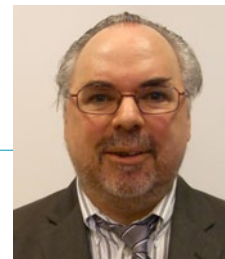
HP: http://www.mktranslationfirm.com
Twitter: @MKtranslation
Facebook: http://www.facebook.com/mktranslationfirm

＊本レポートは音声入力ソフトを使って作成いたしました。
その草稿を弊社オフィス・マネージャーが加筆訂正を加えて本レポートにいたしました。

EVENT REPORT 2

Richard Walker

平成 23 年度 JTF 通常総会・講演会報告

「日英翻訳：音声認識が翻訳の生産性を変える」

リチャード・ウォーカー
日英翻訳者

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

平成 23 年度 JTF 通常総会・講演会

平成 23 年 6 月 2 日（木）16:20 ～ 17:30

【開催場所】ホテル銀座ラフィナート

【講　師】リチャード・ウォーカー（Richard Walker）氏
日英翻訳者
元日本翻訳者協会（JAT）理事

【報告者】新江 裕吾 ㈱ランゲージドキュメンテーションサービス

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

音声認識ソフトの文字変換の仕組み

音声認識ソフトは、発声音を分析して作り出した音の羅列を内蔵の辞書に当てはめようとする際に、そのままではどれが正しい言葉であるかを判断できない。そのため、言葉同士の組み合わせの確率を計算して、ひとつの確率表にまとめ、それを参照して一番可能性の高いものを割り出していく、という統計的な発想をとる。これを理解することで、色々と工夫の仕方が考えられるようになる。

音声認識をうまく利用するには

音声認識を上手に利用するためには、3 つの観点からの工夫が行える。まず自分の喋り方。不明瞭な発声や訛っている言葉では、満足のいく結果は得られない。次に音そのものの質。プロフェッショナルとして、精度の高いマイクを使う必要がある。パソコンよりもマイクに投資することが重要だ。最後に、（言葉の）確率の問題。これを工夫して対処することが主なテーマである。

音声認識ソフトの性能

Windows の Vista と 7 には、"Windows Speech Recognition" というそこそこ使える音声認識ソフトが組み込まれている。ただ、プロフェッショナルに使う場合は Nuance という会社の "Dragon Naturally Speaking" をお勧めしたい。この "Dragon..." には 4 つのバージョンがあるが、ディクテーションの精度に関してはどれも同じである。金額によって、その他の機能の有無、特にオートメーション機能のレベルが変わってくる。なお、音声認識ではスペルミスはないかわりに、誤認が出てくるという問題がある。長い言葉では候補が少ないため認識されやすいが、同じように聞こえる短い言葉は非常に混同されやすいのである。

具体的な工夫の仕方 : 内蔵辞書の編集

ソフトの内蔵辞書に入っていない言葉は、どう頑張っても出てこない。そのため専門用語の多い分野の翻訳では、まずそれらの言葉を辞書に追加する必要がある。その際、"Vocabulary" として 1 つの言葉を入れるだけではなく、よく使うフレーズをまとめて追加することで、精度を上げることができる。また各 Vocabulary に対して色々な

設定をすることもできる。たとえば前後のスペースや数字の処理方法を指定することや、次の言葉を強制的に大文字化するように設定することも可能である。さらに、"Output Form" を設定して、聞き取った言葉を条件に応じて異なる形で出すようにすることもできる。たとえば数字の前に "Number" が来た場合には "No." とし、その後の数字はスペルアウトせずに数字で出す、というように文脈によってアウトプット形式を変えることができる。これを工夫して、たとえば「文部科学省」などの翻訳が面倒な固有名詞については、それに似た音の英語を "Vocabulary" として登録し、その正式な英語名を "Output Form" として入れる、というテクニックを使うこともできる。

具体的な工夫の仕方 : マクロの作成

"Dragon..." のオートメーション機能のマクロには 3 つのレベルがある。まず、Home 版の "Text and Graphics" はひな形的なテキストや画像を入れるためのマクロである。たとえば、"complementary close" というコマンドで、E メールの締めくくりの雛形的な文章をまとめて入力するようにすることができる。これが辞書の編集と異なる点は、改行が使えることと単純なフォーマッティング機能が付いていることだ。また "List" という概念を利用してコマンドを発動するための候補を複数登録したリストを作成することも可能である。

さらに面白い使い方として、「詳細は別紙 1 を参照」のような定型的な文章を処理するために "details"、"annex"、"1 to 15" という 3 つのリストを作成し、"details" と "annex" にはそれぞれ考えられる定型文パターンの日本語に似た発音の英語とそれらに対応する定訳を入れ、"1 to 15" は数字を出すように設定して、それらを組み合わせてコマンドを作成することもできる。そうすることで、"show sigh bedsheets one" と発声するだけで "See Annex 1 for further details" という文章をほぼ自動的に出すことが可能になる。

Premium 版の "Step by Step" マクロではコマンドキーを順番に送り込む機能が可能になる。かつて Trados を使っていたときには [Alt]+[NUM+] というキー操作を自動的に送り込むようにしたり、それに続いて文章の最後にピリオドやクエスチョンマークを自動的に打ってもらえるコマンドを作成したりした。

Professional 版の "Advanced" マクロでは VBA を使った複雑なプログラミングロジックも可能になる。ここでは、発声した言葉を 1 つの変数として取り込むこともできるため、日本語の年号を自動的に西暦に換算するといったマクロが作成できる。ただ、実行スピードが遅いことや、作ったコードの再利用がほとんど不可能、といった難点もある。可能であれば、Word 用のマクロは Word で書き、"Dragon" はそれを発動する手段として使うとか、.NET プログラミングでソフトを組んで、それを "Dragon" からアクセスして発動するようにする、といったアプローチが良いと思う。

MARUYAMA Shinsaku

第 1 回 JTF 翻訳セミナー報告

丸山 眞作
(株)プラスワンパテント
サービス　代表取締役

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
平成 23 年度第 1 回 JTF 翻訳セミナー
平成 23 年 6 月 9 日（木）14:00 ～ 16:40
【開催場所】剛堂会館
【テーマ】「特許翻訳：リピート率 97%の秘密とは」
【講　師】丸山 眞作氏
　　　　　(株)プラスワンパテントサービス 代表取締役
【報告者】早船 由紀見　個人翻訳者
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

皆さんは「コーチング」をご存じだろうか？ Wikipedia の説明によると、コーチングとは、「モチベーションを重視し、個人をのばし、自ら問題を解決していけるようになることを目的としている。」丸山氏は特許翻訳者として多忙を極めていたときにコーチングに出会い生まれ変わったという。本セミナーでは、丸山氏が、コーチングと翻訳のつながり、および特許翻訳者として生き残るための戦略を語った。

セミナーを聞いてそれを効果的に利用するには、自分を「無」の状態にすることが重要だ。聞いた内容をすべて受け入れ、それから咀嚼して自分に役立つものを取り入れる。「無」の状態でないと、固定概念というフィルターが邪魔をして、聞いた内容を無意識のうちに選別してしまうので、聞いても何も残らないことが多い。

特許事務所勤務後、独立してから 20 年間で約 4000 件の特許翻訳を手掛けてきた。独立したころは経済も右肩上がりの時代で仕事がどんどん入り、とにかく必死に翻訳に取り組んだ。一週間まったく外に出ないこともあり、精神的にだんだんおかしくなってきた。コミュニケーション能力は低下。声が出なくなる。人と話すときはまず自分の論理を押し通すようになり、クライアントともよくけんかになった。そのようなストレスから心臓疾患を患った。8 年ほど前にコーチングと出会い、特に、人によって価値基準が異なること、人の価値観を尊重することを学んだ。そして、世界的コーチのアンソニーロビンスの教材で学ぶとともに、アンソニーロビンスの会社の副社長をしていたマイケルボルダック氏に出会った。氏から直接パーソナルコーチングを受けるとともに、マイケルボルダック認定コーチとなった。コーチングに出会ったことで、生まれ変わることができた。その後は、コーチングで得たメンタルマネージメント技術のおかげで自分のメンタル面をコントロールすることができるようになり、翻訳の仕事の効率も上がり、クライアントとの無駄なけんかも少なくなった。現在は特許翻訳をしながら、コーチングスキル／ NLP（神経言語プログラミング）のスキル／催眠療法のスキルなどを用いて、翻訳者、これから翻訳者になりたい人への翻訳コーチング、経営者、弁理士を含む士業の方々などのコーチング／カウンセリングをおこなっている。

世界の特許出願件数は、リーマンショック後若干下がったが、登録件数は増えている。今後の世界動向は、グローバル化、非居住者出願の増加、日米欧中韓の 5 極などといった方向に進むだろう。日本国特許庁の今後の政策は、より安く、より早く、より強い翻訳の出願を目指しているようだ。このような状況の中で特許翻訳者として生き残っていくには戦略が必要だ。目標を明確にする。状況に合わせ柔軟に対応していく。欲しいものにフォーカスして行動する。また、自分から働きかけて顧客のお得意様になる。受注先を世界に広げる。そのために、外国の特許事務所に定期的に自分をアピールするメールを出すのも一つの方法だ。一方で、クライアントからの要望はこの 20 年ほどでかなり変化してきている。短納期、高品質、低レート化し、翻訳者には余裕がなくなっている。厳しい状況の中でも継続して良い仕事をしていくために、翻訳者には、特許翻訳者として必須の技術調査力、知識吸収力、語学力はもとより、バランス感覚、柔軟性、きめ細かさが求められている。そして、謙虚さ、素直さを持って顧客のファンを増やして仕事に取り組めれば継続的に仕事を受注できるだろう。

翻訳とコーチングとは一見結びつきがないように思われるが、実はメンタル面の充実が安定した仕事の出来を左右するという最も基本的なところで関係している。コーチングを受ければ、今までの自分とは違う自分に出会い、新しい一歩を踏み出せるのかもしれない。コーチングを非常に身近に感じさせてくれたセミナーであった。

KAWANO Hiroki

河野 弘毅　ジャーナル編集委員長

アジア太平洋機械翻訳協会(AAMT)報告会・講演会・AAMT 長尾賞授与式　参加報告

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）報告会・講演会・AAMT 長尾賞授与式

2011 年 6 月 13 日（月）14:30 ～ 17:30

【開催場所】ホテルアジュール竹芝（東京都港区海岸 1-11-2）

【主催】アジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）http://www.aamt.info/

【報告者】河野 弘毅 日本翻訳ジャーナル

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2011 年 6 月 13 日に開催されたアジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）の報告会・講演会・AAMT 長尾賞授与式に参加しましたので報告します。

アジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）は機械翻訳の研究開発者・製造販売者・利用者という立場の異なる三者から構成される団体として 1991 年の設立以来 20 年を超える歴史があり、例年この季節に総会を開催しています。総会に続いて開催される報告会・講演会・長尾賞授与式は AAMT の会員でなくても無料で参加できます（懇親会は有料）。

2010 年度の活動報告会

報告会では AAMT で活動している 4 つのグループ（機械翻訳課題調査委員会、AAMT/Japio 特許翻訳研究会、インターネット WG（ワーキンググループ）、編集委員会）から活動報告がありました。

機械翻訳課題調査委員会（報告者:㈱富士通研究所の長瀬友樹さん）は WG1（評価）、WG2（調査・広報・啓蒙）、WG3（標準化・共有化）から構成され、WG1 はテストセット（＝機械翻訳の精度評価に利用する翻訳対象）の構築・公開、評価指標の確立を担当、WG2 はアンケート調査と機械翻訳の歴史に関する情報収集・解説記事執筆を担当し、WG3 は標準フォーマットの策定や有効性の実証試験を担当しています。WG2 が例年実施しているアンケートは震災の影響などで昨年と比較して回答者数が激減したそうですが、機械翻訳の必要性については前回も今回も約 75% が「必要」と回答しているとの報告がありました。辞書登録による作業効率向上についての問いには前回調査で約 80%、今回調査で約 90% が「向上した」と回答しており、特に今年は約 40% が「辞書登録により作業効率が 8 割以上向上した」と回答していました。

AAMT/Japio 特許翻訳研究会（報告者：山形大学の横山晶一さん）では昨年 12 月 10 日に「第 1 回特許情報シンポジウム」を開催しました。そこでの発表内容は http://www.japio.or.jp/kenkyu/kenkyu03-02.html から参照できます。本年度は中国アモイで開催される MT Summit X III において特別セッションを開催するそうです。

講演会・辻井 潤一さん（マイクロソフトリサーチアジア）

講演会では AAMT 前会長の辻井潤一さん（今春東京大学を退官して現在は北京のマイクロソフトリサーチアジアに勤務）が “Resource sharing for research on large scale NLP, Text Mining and machine Translation” との表題で発表されました。内容については報告者の知識水準を越えているため要旨を報告できないのが申し訳ありませんが、辻井先生はこれまでのキャリアを京都大学・マンチェスター大学・東京大学の三つの時期に区分して自己紹介され、京大およびマンチェスター大学で機械翻訳の研究に従事した後、東大では少し方向を変えて基本的な言語処理や意味処理を生命科学のテキスト処理に応用し、ユーザーに使ってもらう技術として研究してきたとこれまでの研究を振り返りました。

近年になって言語処理への期待が高まっている背景として計算機の中に格納された処理対象のテキストの量が加速度的に増えている現実があるという話が印象に残りました。以前は研究に利用するテキストを探すのが大変で、研究開発が先行しても応用先をみつけるのが難しく、シーズが先行してニーズを探す時代が長く続いていたそうですが、状況は今や完全に逆転してニーズが先行して解決のための技術が切実に求められる時代に変わり、機械翻訳を求めるニーズも潜在的には非常に大きいと感じておられるそうです。
この五月からは新天地である北京で機械翻訳を含めてもう一度広く研究テーマを再設定して新しい一歩を踏み出された辻井先生の今後のご活躍に期待します。

UTX 開発チームが第 6 回 AAMT 長尾賞を受賞

AAMT 長尾賞はアジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）の初代会長である長尾真さん（現在は国立国会図書館長）が個人として受賞した日本国際賞の賞金の一部を AAMT に寄付されたことを受けて設けられた記念賞で、機械翻訳システムの実用化の促進および実用化のための研究開発に貢献した個人あるいはグループを表彰するものです。いわゆる学会の論文賞や発表賞といった学術賞ではなく、高性能の機械翻訳システムを商品化したり機械翻訳システムを使った新しいサービスを開始したりといった貢献を授賞対象としている点がユニークです。

第 6 回にあたる今年度の AAMT 長尾賞は「AAMT 機械翻訳課題調査委員会 共有化・標準化ワーキング グループ」が受賞しました。「翻訳支援のためのシンプルでオープンな辞書仕様 UTX を開発、公開し、機械翻訳精度の向上ばかりでなく、辞書の interoperability および翻訳支援へも有効な手段を広く提供している。今後、ローカライゼーション、オープンソース、教育、行政、医療、法律などのさまざまな分野で活用が期待されるとともに、国際標準となる素地を備えている点で高く評価できる。」（AAMT ホームページより引用）というのが受賞理由です。7 名の受賞者を代表してグループリーダーの山本ゆうじさんが受賞講演を行いました。長尾賞の美しい盾の写真を下記のブログで見ることができます。機械翻訳の利用にかかわりがある皆さんは目標として長尾賞を目指してみてはいかがでしょう？なお、AAMT 長尾賞は原則として AAMT 会員を授賞対象としています。

【翻訳】UTX チームが第 6 回 AAMT 長尾賞を受賞
http://goo.gl/axS3u

EVENT REPORT 5

FUKUMOTO Akio

Localization World バルセロナ参加報告

福本 明欧
(株)ヒューマンサイエンス
営業部課長

Localization World バルセロナ 参加報告

年 2 回ヨーロッパとアメリカで 1 回ずつ開催される Localization World は、ローカリゼーションに関するカンファレンスの中でも有数の規模を誇るものである。毎回約 500 名が世界各地から参加する。遠くは南アフリカからの参加もある。

今までの通例だと毎年 6 月と 10 月にカンファレンスが開かれており、今年の 6 月は 14 ～ 16 日の 3 日間にかけてスペインのバルセロナで開催された。私は、翻訳会社のコンサル営業という立場で業界の最新動向やネットワーキングのために 6 年前くらいから定期的に参加しているが、今回はその Localization World の様子や雰囲気、カンファレンスで扱われたトピックなどについて簡単に報告できればと思う。

このカンファレンスでは、メーカーの翻訳担当者、ツールベンダーとサービスベンダーの担当者が一同に介し、新しいテクノロジーやワークフローなどについて率直な意見交換がなされる。参加しているメーカー企業の多くが IT 関連企業なため話題もソフトウェア関連に関するものが多いがライフサイエンスやゲームやリーガルなど、それ以外のトピックも扱われる。

カンファレンスのメインは、15 日と 16 日の 2 日間になるが、14 日には、プリカンファレンスとしていくつかの専門的な部会があり、決まった議題について、ああでもないこうでもないと熱い議論が交わされる。14 日夜にはレセプションがあり、お酒を飲みながら情報交換をする懇親会的な場がある。多くの人はこのレセプションから参加する。

今回私は、このレセプションから参加した。

レセプションにて

　カンファレンスに参加する人たちが受付を済ませて、お酒を片手に久しぶりの再開を楽しんでいる。ざっと見てレセプションに参加している人は 100 名くらいだろうか。19 時からなのだが、みんな待ちきれず、すでに出来上がっている人もちらほら。

　基本的には同業他社の集まりになるので、お互い " 敵 " のはずだが、この会合ではいわば " 戦友 " のような感じ。別の人の表現では、" ファミリー " だと。確かに狭い業界だからね。ただ、弊害もあるようで、ある人は「業界内で結婚して、その後離婚したりすると当人やみんなに会うのが非常に気まずい…」とも。

　当初は、カンファレンスが行われるホテルの 19 階にあるレストランが会場になる予定だったようだが、前の週に連絡がありホテルの庭園でやることになった。屋外の芝生の上で話に花が咲く。夜の 19 時でも日没は 22 時ごろのため西日がまだまだ厳しく、間違いなく日に焼けた気がする。いつものカンファレンスではアジアからの参加者も結構いるのだが、今回は少なかった。日本国内の景気が影響しているのか、特に日本から参加している人はほとんどいなかったようで若干さびしかった。

　というのも、海外のいろいろな人と話せるのも楽しみだが、実は海外で日本の方と話すのも楽しみの一つだからである。国内にいては、絶対に話すことができないような赤裸々な話が、海外にいるとなぜだかできてしまう。" 同郷 " という感じで本音のトークができる。お酒と周りのオープンな雰囲気もひと役買っているに違いない。

　日本からの参加者が少ないので、「日本はどうなのか？」という質問を数多く受けた。震災のときの話や、震災後の現状、夏の電力不足の懸念、昨今の円高ドル安の話などをお伝えした。特に円高の状況については、日本に仕事を発注する海外からすると頭の痛い問題の一つのようで、理解はしつつも何とかならないかといった感じだった。何とかなりません。政府に言ってください。

　終了時間は 21 時なのだが、21 時になってもまったく終わる気配なし。相変わらず、すごいパワーである。

基調講演

　初日の基調講演は翻訳に特化した内容というよりは、翻訳業界も含むビジネス全般に関する話題が取り上げられることが多く、有名な著者による話が多い。以前は後に日本でも話題となった "FREE" の著者によるスピーチがあった。今回は "Six Faces of Global Change and Five Key Innovation Trends" というトピックで話が扱われた。"FUTUREWISE Six Faces of Global Change" という本の著者でもある、Patrick Dixon という方のプレゼン。どうやら、大手一流メーカーに "Global Change" というキーワードでアドバイスしたりプレゼンしたりされている方らしい。

“FUTURE” の頭文字 6 文字からいまの世界が直面している変化の 6 つの面が説明されたが、そのうちのひとつ目は “Fast” だった。「とにかく “Speed” が求められる。みんな待つことができなくなっている。」「エグゼクティブであったとしても、急いでいるときにエレベーターがなかなか来なかったら、エレベーターボタンを連打する。無意味で馬鹿らしいと分かっていることでもしてしまう。」と。参加者全員が彼の書いた本を貰えたのだが、その中には、「ホームページの表示に 30 秒以上かかると売り上げの 30%近くを失うことになる」という例も。考えてみると最近の翻訳業界もそうなのかもしれない。品質第一でじっくり時間をかけたいところだが、ユーザーやお客さんはそれを待ってはくれない。スピード第一になってきているなぁと。

それ以外にもさまざまな角度からの示唆に富む分析があり、よい “気づき ” になった。

MT に関する事例発表について

その後、自分の関心のあるいくつかのセッションに参加した。興味深かったのは、翻訳の生産性向上に関する CA 社の取り組みについての発表。ここ 5 年近くで、エンジニアやプロジェクトマネージメントなど、ローカリゼーション全体にかかわるコストを 1/3 に削減し、翻訳量を 3 倍こなしているというもの。その一端を担っているのが、機械翻訳（MT）で、日本語、中国語、その他欧州言語等に対する取り組みが紹介された。レビューもかなり省略化しているようで、機械的に検出できる部分とスポットチェックで全体に対するコストダウンを図っているとのこと。

「パーフェクトにしようとするのはコストが掛かりすぎる。」とスピーカー。確かに、コストを掛けたからといって、パーフェクトなものが必ずできるわけでもなく、確かに一理あるが、日本人にはなかなか割り切って考えることのできない部分でもある。ドキュメント、UI ともに、MT と機械翻訳後の後編集（post-editing）を組み合わせることで、翻訳スピードを平均 20%の向上させることができたらしい。やはり現時点では、それくらいの効率化が現実的なところか。

今後の鍵としては、MT を意識したソースの品質管理と、用語管理。元の英文の品質が良くなければいくら MT エンジンが良くても良い品質のものは出せないとのこと。

参加者からは、品質に関するユーザーからの評価はどうなのか？という質問があった。半分冗談も含められていたが、「イタリア語、スペイン語、中国語に関してはユーザーからのフィードバックがまったくないので、パーフェクト！だと思う」というコメント。MT の品質の違いというよりは国民性の違いだと思うが、なんだか分かる気がする。

最後に、「今発表していることも、来年の今頃には完全に変わっているかもよ。もっといい方法があればどんどん変わっていく！」とのこと。今の方法に固執していないところがかっこいい！

MT Post-editing の新しい課金体系について

　また、別のセッションでは、チェコのツールベンダーが MT の課金体系の新しい試みを発表していた。Trados を使って 100%マッチ部分の流用とファジーマッチ部分を翻訳するのは従来どおりの流れ。一般的には、新規部分に対して MT を掛けて、一律新規翻訳の何パーセント引きという単価設定が多いが、彼らの提案は、その MT 翻訳に対しても MT ファジーマッチを適用するというもの。つまり MT の生のアウトプットデータと、Post-editing した後のデータを比較して、どれくらい変更を加えたかをマッチ率を使って算出し、それに基づいて単価を設定するというもの。かなり斬新。だが、みんなから矢継ぎ早に質問された。「変えたところだけ課金されるなら、みんないじるでしょ」「翻訳者はこの課金体系で納得するのか？」発表者はタジタジ「僕は MT のエキスパートではないので…」と。でも、なんだかんだでみんなの視線は優しい。どちらかというと、意見交換を楽しんでいる感じ。

その他のセッション

　また、違うセッションでは、翻訳業界でももっとオープンソースソフトを取り入れたらよいのではという提言があった。無理やり感はあるものの、翻訳の最初から最後までオープンソースを使って作業をした場合のデモを見せてくれた。また、プレゼンシートにオープンソースソフトのサイトを一覧でまとめており、みんなの関心を集めていた。

　その他、コミュニティ翻訳やオンライン入札に関すること、顧客側と翻訳会社側の間にあるギャップについてのディスカッションなど、多岐にわたるセッションが 2 日間にわたって 36 コマあった。どれも興味のある話題ばかりで、どれに参加しようか悩むものばかりだった。

終わりに

　毎回思うのだが、海外のカンファレンスに参加すると、かなりのスピードで変化している、もしくは変化しようとしていることを肌で感じることができる。変化をあまり好まない日本人気質にカツ！を入れるためにも、自分にとってこういった場は非常に大切だ。

　個人的には毎回特に MT 関連の動きに注目しているが、MT はもはやチャレンジではなく、翻訳する際の選択肢の一つになっている。いくら日本語の品質はあまり良くないと突っぱねたとしても、この世界的な流れを食い止めることはできない。MT は“使えない”ではなく、どのようにしたら、もしくはどのような場面であればうまく“使うことができるか”を誰しも考える必要があると思う。ものづくりとしてのこだわりを持ち続けたいという思いとの葛藤はあるものの、うまくバランスをとっていく必要性を実感する。

　今回の報告もかなり抜粋して部分的なものになっているので、詳しく知りたいと思った方は是非実際に参加してご自身で生の情報に触れることをお勧めします。

　詳しくは Localization World のサイト（http://www.localizationworld.com/）をご確認ください。次の Localization World は 10 月 10 ～ 12 日にサンタクララで開催される予定とのこと。西海岸で行きやすいということもあり、日本からの参加者も増えるといいなと思う。
　ご関心ある方は是非！

COLUMN 1

HAGINO Nami

翻訳者を志して ― 私の果てしない旅

萩野 奈美
フリーランス翻訳者

　英語と日本語の狭間で適切な訳語を模索し、選定して対象読者に分かりやすい訳文を練り上げていくこと。原文の意味から外れることなく、かつ原文に引きずられた直訳ではない自然で的確な訳文を作成する「翻訳」の作業は、たとえて言うならば英語と日本語の間を綱渡りしているようなものであると考えています。こうした至難の業であるからこそ、最善を尽くして仕上げた自分の翻訳が公開され、読者の方々に好評をいただいた時の喜びは格別です。私が翻訳業務を始めたのは大学卒業後のことで、複数の IT・通信関連の企業で翻訳業務に従事しました。その後、米国のモントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院（MIIS）の日本語翻訳・通訳プログラムで通訳と翻訳を学び、翻訳の修士号を取得し、米国テキサス州オースティンにあるナショナルインスツルメンツ（NI）のローカリゼーション部で、翻訳を含むローカリゼーション業務全般を担当しました。現在は、故郷の東京に戻り、フリーランスで翻訳およびレビュー業務を行っています。モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院での翻訳の学習、ナショナルインスツルメンツでのローカリゼーション業務の経験を共有することで、同誌の読者の皆さまの一助となればと思い、今回筆を執ることにしました。

MIIS の日本語翻訳・通訳プログラムでの学習

　米国のモントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院で翻訳と通訳を勉強することを決意したのは、今から 6 年ほど前のことです。その頃は、東京にある大手情報通信企業で社内通訳翻訳者として勤務していました。エンジニアを対象読者にした仕様書などの技術文書や会議資料を翻訳し、会議での通訳をしていましたが、自分の翻訳・通訳スキルに伸び悩みを感じていました。大学在籍中に翻訳と通訳の授業、そして翻訳学校が開講している 1 年間の通信講座を受講し、大学卒業後も就業しながら通訳学校で通訳を学んできましたが、翻訳と通訳の勉強に専念する時間が取れず、中途半端な学習となっていました。海外に留学し、自分が大好きな学問を究めたいという夢をかねてから抱いていた私は、慣れ親しんできた大手情報通信企業での仕事を離れ、一流の通訳翻訳者になるという固い決意を胸に渡米しました。モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院での日本語翻訳・通訳プログラムに入学したのは、2005 年 8 月のことです。

モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院での日本語翻訳・通訳プログラムでは、原則として 1 年目は翻訳と通訳の両方を勉強します。1 年次の翻訳と通訳の授業では、日英・英日翻訳、日英・英日通訳、そして日英・英日のサイトトランスレーション（日本語・英語のテキストを短い意味のひとかたまりごとに訳していく学習法）の授業を受講します。2 年次には 4 つの専攻コース（翻訳、翻訳・ローカリゼーション管理、翻訳・通訳、会議通訳）に分かれて、それぞれの専攻コースに応じた授業を受講し、2 年間の学習の集大成として、専攻の修士号の取得と卒業試験合格を目指します。

私の場合は、1 年目に翻訳･通訳の授業、および関連科目として英文編集と英語スピーチの授業を受講し、2 年目からは翻訳を専攻にして、翻訳の授業を中心に受講しました。ここでは、モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院での日本語翻訳・通訳プログラムで私が受講した翻訳の授業について述べます。

MIIS の翻訳の授業で得た成果

1 年目（前期）の翻訳の授業では、観光向けのパンフレット、書籍（ノンフィクション、フィクション）、雑誌記事（時事）、Web ページ（広告、技術）、医学論文などの幅広いジャンルの翻訳、および経済関連の訳文チェックを行いました。1 年目（後期）の授業では、経済に関するトピックを扱い、2 年目には卒業論文、翻訳理論、CAT（Computer Assisted Translation）、IT、電子・機械工学、特許、医療、化学などの分野の技術翻訳、そして技術翻訳以外のさまざまな分野の翻訳の授業を受講しました。このように幅広い分野の翻訳に取り組むことで、各分野で求められる文章表現や訳語を習得し、実務で複数の分野にわたる多種多様な文書を翻訳するための素地を培うことができました。

翻訳の授業は、ディスカッションとプレゼンテーションから主に構成されています。毎回の授業で出される課題について、選定された 2 ～ 3 人の学生の翻訳を次回の授業までに目を通しておき、当日の授業でディスカッションします。翻訳の授業でのディスカッションを通して、誤訳、原文との意味のずれ、再考が必要な訳語および訳文に対する感覚を養うことができました。また、他の学生の翻訳に触れることにより、自分にはない語彙や文章表現を習得しました。当日の授業では、自分の翻訳の評価結果が教授から返却されます。ME（Meaning Error）、BW（Better Word）、good!、などのコメントが書かれた教授の評価を見るたびに、一喜一憂し、国語辞典、英英辞典、類語辞典を参照しながら適切な訳語を模索する毎日を過ごしたものです。

また、翻訳の授業では、毎回の授業で出される課題に関連するトピック、もしくは翻訳に役立つトピック（例 : 半導体、検索エンジンと検索テクニック）について、プレゼンテーションをします。1 学期に 2 ～ 3 回プレゼンテーションをする機会がありました。プレゼンテーションを準備したり、聞いたりすることで、各トピックについての知識を深めることができ、大いに勉強になりました。

モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院での日本語翻訳・通訳プログラムで習得した最も重要なことは、テキストや話し手が伝えようとしている「メッセージ」をとらえ、対象読者や聴衆に分かりやすい訳文を作成することです。モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院で勉強するまでは、一語一語を正しく訳出することばかりにとらわれていて、その結果、不自然で読みづらい訳文となることがありました。直訳的な私の翻訳に対して、教授からは「一語一語を英作文的に翻訳することから離れ、もっと生き生きと自由に、大胆に訳してみるとよい」とのアドバイスをいただきました。今日に至るまで、この教訓を常に念頭に置き、的確かつ対象読者に読みやすい訳文の作成を目指して切磋琢磨しています。

技術翻訳者としての第一歩

モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院に入学した当初は、一流の通訳翻訳者になりたいと強く望んでいましたが、1 年間翻訳と通訳を勉強した結果、瞬時に意味を掴んで訳出する通訳よりも、じっくりと落ち着いて訳文を練る翻訳のほうが自分の性格に合っていることが分かりました。そこで、2 年目からは翻訳を専攻にして、翻訳の授業を中心に受講しました。2 年目の技術翻訳の授業で、用語の訳や表記の一貫性が不可欠な技術翻訳に適性を見い出し、将来は一流の技術翻訳者として活躍することを希望するようになりました。国際的な実務経験を積むために海外で就職したいと考えていた私は、モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院のジョブ・フェアを通して、米国テキサス州オースティンに本社を置くナショナルインスツルメンツで社内翻訳者として就業する機会を得ることができました。新天地での生活と仕事に対する期待に胸を膨らませながら、テキサスへと渡りました。ナショナルインスツルメンツのローカリゼーション部で業務を開始したのは、2007 年 6 月のことです。

国際的なハイテク企業での経験

ナショナルインスツルメンツのローカリゼーション部は、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、日本語のチームから構成されています。私は日本語チームに所属し、ナショナルインスツルメンツが提供するコンピュータベース計測・テストオートメーション製品、および製品に関するドキュメントの翻訳を含むローカリゼーション業務全般に携わりました。

翻訳業務では、印刷物やオンラインヘルプなどの技術文書の和訳を主に手がけました。ローカリゼーション業界で多用されている TRADOS（Workbench、TagEditor、MultiTerm）や Adobe FrameMaker などのさまざまなアプリケーション、および社内ローカライズツールを活用して、1 日平均 2000 ワードを翻訳し、成果物のレビューや用語の訳の一括修正を行いました。数々のローカライズプロジェクトを通して、用語や表現に一貫性のある翻訳を TRADOS や種々のアプリケーションを駆使して効率的に実現する方法を習得することができました。

また、翻訳業務のみならず、ローカリゼーション業務全般に関わることができたのも、貴重な経験でした。英文ライター、DTP 担当者、製品開発者、ローカリゼーション部の同僚と積極的にコミュニケーションを取りながら、TRADOS を使用した翻訳ワード数の解析、ローカライズプロジェクトのスケジュール管理、インストールしたローカライズ版ソフトウェアの翻訳チェックを含む、ローカリゼーション業務全般を担当したことで、ローカリゼーションのプロセスについて理解を深めることができました。

ナショナルインスツルメンツでの業務を振り返って、米国の企業文化と、複数の言語チームから構成されるローカリゼーション部という国際的な環境の下で業務ができたことは非常に有意義な経験であったと感じています。たとえば、現地の米国人の同僚がビジネスで多用する英語表現を習得し、会議や職場でのコミュニケーションを通して自分の意見を堂々と述べることを身に付けました。

また、複数の言語にローカライズするプロジェクトで、ローカリゼーション上の諸問題をローカリゼーション部の他言語チームの同僚と議論し、他国の言語の背後にある文化を垣間見ることができました。

MIIS と NI での経験を振り返って

的確で読みやすい訳文であるか。より適切な訳語はないだろうか。東京の実家に戻り、この問いを自分に投げかけながら、フリーランスでの翻訳およびレビュー業務を行う日々を過ごしています。業務の関係者と綿密にコミュニケーションを取り、多種多様なプロジェクトの翻訳・レビュー業務を担当する中で、モントレー国際大学翻訳通訳・言語教育大学院の日本語翻訳・通訳プログラムでの学習、そしてナショナルインスツルメンツでのローカリゼーション業務の経験が現在の仕事に大いに役立っていると実感しています。現在に至るまでの道のりは順風満帆ではありませんでしたが、翻訳に対する情熱を持ち、すべての翻訳課題・プロジェクトに全力を尽くして取り組んできたからこそ、翻訳者として着実に成長してきたと思います。今までの学習・業務経験を最大限に活かしながら、最高品質の翻訳を目指して、今後も一歩一歩前進していきたいと強く願っています。

拙文をお読みくださった同誌の読者の皆さまにお礼を申し上げるとともに、読者の皆さまの今後の益々のご活躍を祈念して、筆を置くことにいたします。

COLUMN 2

SAKAMOTO Makoto

翻訳で生き残る

需要多様化への柔軟な対応と国際化が必須

坂元 誠
社団法人日本翻訳連盟参与
実務・技術翻訳者

翻訳での 22 年間は助走期間でした

さる 6 月 2 日の総会と懇親会に参加し、JTF 加盟の翻訳会社の方がたならびに個人会員の皆様と最近の翻訳需要の動きなどについて貴重なお話を聞かせていただきました。ますますお元気な勝田元会長のお目にかかり思い起こしたのですが、元会長のご発案により、当時 JTF 事務局長を拝命していたときに企画運営させていただいた「翻訳ビジネスのあり方」を考えるためのセミナー（計 8 回）につづき、いまは亡き林秀厳元 JTF 副会長を委員長に仰いでご指導を受けながら毎年 10 回、休みなく 10 年間にわたり浅沼、高崎、久徳元理事ならびに個人会員 2 氏とともに「JTF 翻訳環境研究会」のお世話をさせていただいたのが私です。

事務局長として奉職中には、とくにニフティ株式会社の中村常務取締役と意気投合して立ち上げたパソコン通信による「JTF ほんやく検定」が順調に推移し、その後インターネット上でもさらに成果が上がっていることはご同慶の至りです。元労働省監督下の社団法人日本翻訳協会（JTA）が認定する 1 級トランスレーター合格者パーティに臨席された初代 JTF 事務局長板垣新平先生の強いおすすめにより 1989 年に JTF に入会した私は、1990 年に箱根で開催された第 1 回日英翻訳国際会議（IJET-1）に参加して同時に JAT の会員にもなりました。

それ以前の 22 年間、多国籍企業でエポキシ樹脂や特殊ガラスなど工業材料の用途開発に従事していて技術・ビジネス翻訳に必要な現場知識があることから、実業翻訳という仕事自体にはいまも新鮮な魅力を感じつづけていますが、欧米の MBA 取得社員たちから実務的な手法を学んできたため、「翻訳という仕事の収益性を高める」という課題にはいまも意欲を持っています。私の場合、まだまだ 10 年以上は翻訳でこの業界のお役に立ちたいと真剣に考えております。

翻訳需要と翻訳工程の変遷

日本国内で産業翻訳が「ビジネス」になったのは、各種プラントの取扱説明書の大量英文翻訳が最初であり、その後、コンピュータ・マニュアルの日英翻訳がこの業界の相当部分を占める時期がつづきましたが、この二つの分野については翻訳英文が定型化していることから、ネイティブ日英翻訳者でなくとも、日本語のネイティブである我われが過不足のない仕事をしていたものです。

ところが、産業翻訳の需要があらゆる分野で伸びはじめ、日英翻訳でも英文の質が問題となる文書については日本語のネイティブは排斥されるという業界規範のようなものができ上がりました。とはいえ、内容の専門性の高い文書、あるいは日本の複雑な社会機構や慣習が主題となる文書の場合、まずその専門分野で経験の深い日本語を正確に読解できる NJS（Native Japanese Speaker）の日英翻訳者が英文に仕上げ、それを NES（Native English Speaker）の日英翻訳・編集者が達意の英文に仕上げ、さらに英語の達人でもある日本人の編集長が綿密に校閲して完成版としています。

総会後の懇親会でも、3.11 以後、新年度移行とともに翻訳需要が激減しているという話題で持ちきりでした。今後どのような形で翻訳の需要が再開するのか、実に不透明な状況にあります。

最近の国内での需要状況

もっぱら欧州からの発注（後述）に頼っている私の場合、日本国内については私なりの現場経験を評価してくださるお客様（翻訳会社）からここ数年間、同種の文書について継続してご発注いただいており、とくにこの 2 年間は宇宙航空関係および情報通信技術分野のお客様数社から、月刊誌を含む定期刊行物や事業概要書などの日英翻訳をご用命いただいております。自分の英文がお客様側の専門家（欧米人）による加筆修正を経てウエブページに現れるのが楽しみです。幸い、私の地の英文がほとんどそのまま掲載されているのを見るのもまた一種の癒しになります。

それはともかく、年度末繁忙期のあと、定型的な英文文書の需要が激減していることは否めず、実に困ったことです。これが一過性の現象であることを念じるほかありません。この際、なんとか最低限の仕事は確保しなければならず、なりふりかまわず安値でも飛びつく仲間を咎めることもできないでしょう。

二年前からの傾向として、外国で営業している日本企業の企業合併などにかかわる日本語文書で、いわゆる社内用語など実務経験がなければ判読もできないほど難解な日本文を短期間で大量に英文化しなければならないが Trados の使用を歓迎するという、我われ日本人の日英翻訳者には有難い話も時たま発生していて、とくに米国内の翻訳会社から照会をもらっています。この種の仕事は、NES 日英翻訳者の垂涎の的となっています。

国内需要については、ある地域で特殊法人がらみの客先で大量に競合入札があるようです。その場合、意外にも日英と独日の翻訳の話が多いのが面白いところです。ただし、その関係の翻訳会社の中には元原稿の一字当たり単価ではなく、文書全体についての一括料金で話を進める事例が多く、単価に換算すれば相場の 3 分の 1 にしかならないという厳しい話もありますので、受注時にしっかり確認しないと大変なくたびれ儲けとなってしまいます。

分野や市場の多角化に対応

近年、先端技術の各分野では境界領域的な研究が盛んになり、例えば通信技術でも携帯電話による電波の生体安全性の疫学研究が進んでいて国際的にも評価されています。通信技術が主体の文献を扱う技術翻訳者としては、内容の一部に医学にかかわる記述が含まれていても、よほど難解なテーマでないかぎり内容解釈において安全圏内での日英翻訳に取り組まねばなりません。幸い、ウエブページ検索を多用すれば、元原稿とほとんど同じ内容の英語論文を読むことができますので、その基本概念を日英両文でしっかり理解したうえで表現での「安全第一」を鉄則として実際に使われている英語の用語や表現を借用すれば、大過なく日本語の原稿を英語化することができます。つまり、いまは昔と違って、『私は電気通信が専門ですから』と言って、分野の異なる翻訳についてのせっかくの依頼を辞退することはあまり誉められたことではありません。ただし、翻訳分野の根無し草になってしまったら軽蔑されるだけですから、自分なりの専門領域の「背骨」だけは示しておくべきでしょう。

新しい地域で多様な仕事を獲得

数年前からコンピュータマニュアルなど大量翻訳の需要に陰りが見えはじめ、自動車工業でも電子制御関連の大型英訳需要がばったりと途絶え、2007年ごろからはお世話になっていた同じ翻訳会社から一般産業機械の英訳や独日翻訳の中規模の仕事を代りに頂戴していました。量が減って内容の多様な文献で時間当たりの翻訳量が減ってもなお訳し上げ200語3,000円近い料金を頂戴していましたので、まだ幸せでした。しかしその後がいけません。受注の絶対量が少なくなって、他の翻訳会社からもお請けするようになり、料金も下がる一方でした。例外的に好ましいお話としては、ある経営コンサルタントが『JTFのサイトで拝見したかぎり坂元さんが適任であり内容が微妙ですから直接にお願いしたい』とおっしゃって、企業経営関係文献の日英翻訳を、機密保持契約に基づいて継続的に注文してくださいました。それはJTF会員として得た有り難い特典の一つです。

需要がジリ貧になるのはつらいので、私も積極的に攻めの姿勢に転じ、2008年ごろから求人の活発になった米国や欧州の翻訳会社合計21社から照会をもらうようになりました。　米国の中規模翻訳会社からは、一昨年に発生した日系企業グループ内文書の日英翻訳をときどき受注していますが、私の仕事の大部分は欧州翻訳会社からの英日、独日、そして意外にも日英翻訳の仕事です。どちらかと言えば、欧州の翻訳会社のほうが私の性格には合っているようで、東日本大震災の際には各翻訳会社の担当者から見舞いのe-mailを頂戴し、仕事の話がないときも、それぞれの国情や市場動向についての情報交換を求められています。

欧州の翻訳会社それぞれが2～5ヶ国に支社や事務所を置いて手広く営業しており、米国企業との合併・合弁会社も相手にしていて日本語主体の翻訳が結構多いのが面白いところです。また各支店が当地の日系企業から翻訳を受注することもよくあります。大手多国籍企業なら必ずといってもよいほど在日子会社や代理店を持っていますが、欧州の本拠から当地の翻訳会社に発注する形でのローカライゼーションの事例が多いことに驚きます。日本語への翻訳ではこれまでに合計60名近い翻訳者のトライアルを厳密な評価基準に従って査定してきました。その評価では、受験者それぞれの特徴について散文的かつ客観的な批評を加えるよう求められ、幸い、私の査定内容が各社の参考となったようです。欧州在住かと思われる翻訳者が多いのですが、その人たちに共通する問題点は、日本語の現代的な表記法や、マニュアル、案内書などでの敬語の使い方にまったく関心のないところが目立ちます。また、これは日本在住者でも同じですが、生きた現場（ビジネスを含む）用語に無知な翻訳者が結構多いことも問題でしょう。私が評価した内容を各社が参考として日本語への翻訳で発生する問題を予防する処置をとっているのは好ましい傾向かと思っています。

なお、これまた面白いことに、大幅な円高となってユーロの為替レートが30%も目減りしましたが、当初の単価設定が日本の相場よりも30%高くしてあり、日本の現在相場が下がっていますので、料金面での損失は少なく済んでいます。今後とも、欧州翻訳会社の動きに注目していきたいものです。日本国内の翻訳会社には、欧州翻訳会社の存在が煙たいことでしょうが、逆に、欧州翻訳会社との提携による翻訳市場の拡大と需要の平準化も、経営戦略の一環として視野に入れておかれればいかがでしょうか。なお、東会長ならびに事務局の中野様のご諒解を得て、JTF加盟個人会員で法人化しておられない方がただけの情報意見交換のための非公開メーリングリストを運営させていただいており、上記のような内容の一部も報告しております。ご興味がおありのJTF個人会員翻訳者なら歓迎しますのでご連絡ください。

和文英訳手順の標準化手法

英訳手順の標準化による品質の平準化と翻訳者育成の促進

田原 利継（ILC 国際語学センター　実務翻訳コース専任講師）

英訳の生産性は、一次翻訳の品質に大きく依存します。普通、英訳商品は、日本人翻訳者による一次翻訳をネイティブチェッカーが校閲して完成されます。このネイティブチェッカーの生産性は、当然のことですが日本人による一次翻訳の品質に大きく依存します。例えば、一次翻訳で、能動態で書くべき文が受動態で書かれていると、チェッカーは文構造を完全に変えて、リライトしなければなりません。これは大変手間です。逆に、一次翻訳で、適切に態が選ばれて、適切な構文で英訳されていると、チェッカーの作業は効率が上がります。

本論は、英訳手順を標準化することにより、一次英訳者の英文構文生成を適正化することを助け、英訳の生産性を全体として上げることを目指します。併せて、英訳翻訳者の養成とスキルアップのためのプログラムをシステム化することで、人材育成を促進することを目指します。英訳手順を標準化するための核心は、与えられた日本語原文から、適切な英訳構文をいかに適確にするかにあります。この英語構文を発想するプロセスを一般化することができれば、英訳手順の標準化が実現できます。このプロセスの一般化を筆者は、次のように 5 ステップで構想します。

ステップ 1：日本語原文を前編集して、各文の修飾成分と幹文とを分離する。
ステップ 2：幹文の主語を決め、幹文の文型を決定する。
ステップ 3：幹文を英訳する。
ステップ 4：修飾成分を英訳して、英訳した幹文に接続する。
ステップ 5：前置詞と冠詞を点検して、英訳を完成する。

この標準英訳手順の導入により、次の 5 つのメリットが得られます。

1．同じ手順で翻訳されるので、翻訳品質が安定する。
2．各翻訳者の作業が平準化され、全体として英訳の生産性が向上する。
3．主語の選択や文型など、品質管理のポイントが明確になり、英訳の品質管理が確実で、効率化する。
4．ネイティブチェックがスピードアップする。

次回から英訳手順の標準化に関して、次の 5 項目について連載しますので、ご期待ください。

1．日本語前編集の視点
英訳を行う以前に、日本語原文を前編集するための 12 の視点を提唱します。

2．幹文の英訳における文型の選択
7 文型から適切に文型を選択する方法を解説します。

3．修飾成分の英訳と幹文への接続
修飾成分を体言修飾と用言修飾に分けて、その英訳方法を提案し、適切なコネクターで幹文に接続する仕方を解説します。

4．冠詞の点検
冠詞の機能は名詞の意味を精密化することにあることを明確にして、冠詞の用法を意味論から解説します。

5．前置詞の点検
主要な前置詞の用法を意味論から解説します。

****

編集者からのおしらせ
田原利継さんによる新連載『和文英訳手順の標準化手法』は、日本翻訳ジャーナル 2011 年 11/12 月号から掲載いたします。森口理恵さんの『【医薬】誌上トライアル』と交互に隔号での連載となります。どうぞおたのしみに。

TAHARA Toshitsugu